

令和3年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる
「共同研究班」 研究報告書

令和5年1月5日現在

研究課題名	スラブ・ユーラシア地域を中心とする境界・国境研究		
担当者	氏名		所属機関・職
	1	岩下明裕	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
班員	氏名		所属機関・職
	三村光弘		公益財団法人環日本 海経済研究所調査研 究部主任研究員
	専門とする研究分野		
	北朝鮮経済、北東アジアを中心と するユーラシアの経済交流		
研究テーマ			
ロシアの国境地帯における越境観光の可能性			

研究成果の概要

2021年10月のロシア・ダゲスタン共和国、沿海地方、ハバロフスク地方およびユダヤ人自治州における現地調査を通じて、ロシアの国境地帯における観光の現状を把握し、国境を越える観光（以下、越境観光とする）の可能性について検討を行った。

ロシア・ダゲスタン共和国とアゼルバイジャンの国境地帯については、テロリストの越境の可能性のある山岳部を除き、概ね平穏な状況である。旧ソ連国内の境界であった国境であり、物流や人流が従前より多く、コロナ禍に置いても一見非常に簡単に往来できる雰囲気ではある。ただし、機械警備は厳重に行われており、国家を隔てる境界となっている事実には変わりがない。

ロシア・沿海地方と中国との国境地帯においては、コロナ禍の中で、人流が停止している中でも一定程度の物流が行われていることをウスリースク市の市場やクラスキノ、ポルタフカ、パダラチヌイ、トゥリー・ログといった税関への訪問で確認した。後述するハバロフスク地方よりも中国との物流は盛んで、ハバロフスク地方から中国向けの貨物も、沿海地方経由が相当程度あることが、訪問中に確認した自動車のナンバープレートなどから推測された。

ロシア・ハバロフスク地方と中国との国境地帯については、ロシアが長年実効支配していた大ウスリースキー島に関しては、ロシア側の観光開発が遅れており、中国からの越境観光はもちろんのこと、ロシア国内の観光客の受け入れすらも行われていない状況であった。中ロは近年、準同盟関係にあると言われている。しかし、グローバルな問題について両国間の協力が行われる中でも、極東ロシアにおけるリージョナルな関係では、中国が圧倒的に人口が多く、両国の国境地帯の人口比に大きな差がある中で、中国からの「浸透」を警戒する雰囲気があるなど、ロ中関係

研究成果の概要（続き）

は一筋縄ではいかない関係であることを痛感した。

その後訪問したユダヤ自治州のロ中国境地帯においても、両国の交流はアムール川の両岸に位置する地方自治体間の交流や国境貿易があるものの、旧ソ連構成国間の交流とは大きく異なり、非常に密度の低い交流に止まっていることを調査を通じて確認した。

現在の状況では、極東のロ中国境地帯における越境観光は、沿海地方の一部地域、パグラチヌィやクラスキノでは可能であるが、その他の地域では、第三人に開放されている税関が限られていることなどからかなり難しいことが分かった。ダゲスタン共和国との比較においては、やはり旧ソ連構成国同士の国境とは、経済交流の密度が異なり、物流や人流の密度に大きな差があることが分かった。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。

三村光弘「コロナ禍のロシアに行く（上）」『ERINA REPORT PLUS』163、46～48 ページ。

三村光弘「コロナ禍のロシアに行く（下）」『ERINA REPORT PLUS』164、42～44 ページ。

※謝辞については、ロシア国境地帯の敏感性に鑑み、上二つの成果については表示しなかった。今後、日ロ関係の改善が見られれば、謝辞を付した論文を執筆する予定である。

当該研究活動をもとに採択された研究プロジェクト（応募中の研究プロジェクトを含む）

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。